



特集 (一社)日中文化振興事業団による『胡先生と行く 三国志・赤壁の旅』企画

2024年10月11日～16日、(一社)日中文化振興事業団が主催する「胡先生と行く 三国志・赤壁の旅」5泊6日で中国湖北省武漢市、荊州市、咸寧市、赤壁市及び湖南省岳陽市、華容県に行ってきました。

事業団の「三国志」定期講座を担当した井上一先生を団長として、一行は三国志関係の荊州、岳陽、赤壁古戦場の現地学習。咸寧市政府のご配慮により、赤壁古戦場、潜山国家森林公园竹子博覧館、桂花博覧館、黄鶴楼酒業の見学、湖北科技学院鄂南文化展覧館の岳先生との交流、また、道教関係の永興観、長春観の方々との交流も出来ました。実りある中国旅行でした。

今回の旅行を記念に残すよう胡金定から参加者全員に旅行記や感想文を書いて頂き、「(一社)日中文化振興事業団会報」(創刊号)に特集として掲載しました。



参加者の氏名(順不同、敬称略)を下記のように記しました。

若月章、井上一、秦爽、余保充徳、鴻原森蔵・明子、竹田昇・清美、岡田達也・直子、中島章雄、古瀬裕功、村田利治、金馬悦子、久野正博、厚澤雅記(甲南大学学生で、厦門大学留学中)、胡金定 (参加者17名)

三国志 赤壁の戦いについて

三国志の赤壁の戦いは、208年に中国の長江沿いで、曹操軍と孫権・劉備連合軍の間で行われた戦いです。

当時、曹操は中国の北部を統一し、南下して江南を征服しようとしていました。一方、孫権は江南の呉を治め、劉備は蜀を治めていました。曹操は、呉と劉備をそれぞれ倒して、天下を統一しようと考えていました。

赤壁の戦いは、曹操軍が圧倒的に優勢な状況で始まりました。曹操軍は、当時の中国最大の軍隊である80万の大軍を率いていました。一方、孫権・劉備連合軍は、合わせて5万程度の兵力しかありませんでした。

しかし、孫権軍の周瑜は、曹操軍の船を火で焼くという奇策を思いつきました。周瑜は、小船に油を積んで、曹操軍の船に接近させました。そして、小船に火をつけると、曹操軍の船に飛び移り、火を放ちました。

曹操軍の船は、瞬く間に炎上し始めました。曹操軍は、火を消そうとしましたが、うまくいきませんでした。そして、曹操軍は、多くの兵士を失いながら、撤退を余儀なくされました。

赤壁の戦いは水軍が弱体だった曹操軍が長江での水上戦に誘い込まれて大敗し、曹操は南下を断念した。その結果、諸葛孔明の構想した「天下三分の計」が実現し、曹操の魏、孫権の呉、劉備の蜀の三国が鼎立する三国時代となりました。



レッドクリフの描写: 南下してきた曹操の大軍は20万(80万とも言う)、それに対する劉備・孫権の連合軍はわずかに5万という劣勢であった。長江中流の赤壁で双方の水軍が対峙したが、水軍戦に不慣れた曹操軍は波風による船の転覆を抑えるため鉄鎖でつないでいた。孫権軍の指揮官周瑜は、風が強まったのを見きわめ、部将の黄蓋を曹操軍のもとに送り、偽って投降するふりをして油を注いだ芝草を満載した10隻の曹操軍の船に体当たりさせた。火はたちまち燃え広がり、水軍のみならず陸上の曹操の陣営まで炎がおよび、大混乱に陥った。孫権・劉備連合軍は総攻撃に転じ、曹操軍は北方に向けて敗走した。

古戦場赤壁に立つ

岡田達也・直子



NHK「人形劇三国志」が私を中国大陸へ三国時代へと引込む入口でした。かれこれ40年近く前、青年時代にたまたま見た同「人形劇」から乱世の群雄が天下統一へ戦を起す。それに軍師なる者が存在する。全68話45分ものはNHK看板の大河ドラマに劣らぬ番組でした、これをきっかけに吉川英治の三国志をむっさぼり読みました。劉備、関羽、張飛や孔明と曹操や孫権…名だたる人物を余すことなく人間模様を描きつつその歴史の展開は、吉川英治ならではのワクワク感がありました。なかでも赤壁の戦いは中盤の最大の見せ所であり、天下三分の幕開けと言われており、勇者達の舞台、歴史的なピンポイント、赤壁古戦場に立つことは感慨深いものがありました。

赤壁の戦いは2008年に中国で映画化、題号は「レッドクリフ」でおなじみです、興行成績は当時中国国内で歴代1位置。本家中国でも赤壁の戦いに注目されていることがわかります。

日本では同年11月に公開。日本題は「三国志の完全映画化」「信じる心、残っているか」、同年度4位の興行成績でした。日本でも、三国志といえば赤壁とかがえます。三国時代の戦乱といえば、赤壁の戦いが一般的のように思われます。その赤壁古戦場はテーマパークとして開発され、名場面を復元もありがたいことでもあります、工夫こらした施設で味わい深く楽しませて頂きました。

そして井上一先生著作の「三国志演技名場面」は、40年前の感動から新たな人間学を学び直す書籍となりました。旅行中に著者より解説も頂き、夫婦してこころに残る旅行となりました。

出発当日に赤壁へ行けない、かもしれない。との出来事に、猛反発の胡先生の発声はこころ強くもあり、頼もしく嬉しかったです。

次に、今回は三国志ゆかり地や観光名所へ訪問しました。

“胡先生と行く”と冠されるとおり、訪問各地で施設の説明から食事に至るまで、身に余る贅沢な対応を頂き、家内と場違いと思いつつもひたっておりました。

また、家内は夜な夜な買い物に行きたいと、ホテルでお店の名前を中国語でメモ用紙に書いてもらい、出かけました。金馬さんと岡田夫婦3名です、10分ほど歩くと目的地と聞いていたのですが、ない。ウロウロしましたが、ない。一本道で間違えることは、ない。人通りはあったので、すれ違う人にお店の名前を書いたメモを見せました。話しかけたのは、若いお嬢さんでした、選んだわけではありません。一緒にお店を探してくれましたが、彼女もわからない様子。彼女はタクシーを止めて、私達と一緒に乗ろうとジェスチャーをするのですが、さすがにそれは辞めました。携帯で翻訳しながらお店を探しましたが、わからず。時間もたつので、結局コンビニで妥協しました。彼女にお礼を言おうとしましたが、お店の入口で私達を待っている様子、早々買い物を終えると、彼女は嬉しそうにしています。「ホテルへ帰ります」の翻訳を彼女に見せると、ホテルの近くまで送ってくれました。仕事帰りと思われる彼女、言葉の通じない日本人の相手をし、買い物に付き合う。早く帰ったかっただろうに、私達を心配してくださった、名も知らぬ方、本当にありがとうございました。

レッドクリフの日本語キャッチコピーは「信じる心、残っているか」でありました。桃園の誓いから後出師の表に、古代の英雄たちの信じる心が、次元は違いますが、名も知らぬ親切な中国女性に通じるものがあると感じました。

現代、日中関係がギクシャクする中、改めて三国志にみる人間関係が羨ましく思えました。最後に、旅行にご尽力くださいました、胡先生始め皆さま、本当にありがとうございました。



悠久の中国を巡って 中島 章雄

目指すは1816年前、三国志の天下分け目の「赤壁の戦い」の地。超高層ビルやホテルとその間にある廃墟かと思えるような民家を見ながら、発展と課題を抱えて悠久の歴史の香りと近代化を推し進める建設の槌音を感じながら、巨大で広大な中国をバスで走破。湖北省（武漢、咸寧、赤壁、荊州）と湖南省（岳陽）を巡りました。

昨年、胡金定先生に、儒家、道家などの中国古代思想を学びました。インドから中国、朝鮮半島を経て伝わった仏教は、私たち日本人の心の奥底にその思想が根付いています。壮大な物語にも思える釈迦の教えは、中国で儒家や道家の思想の考え方や智慧も合わせ、天台大師の理論構築で、世界中に知られ、理解されるようになりました。湖北省仙桃市の道経寺院・永興観で、観長、葉信園さんのお話などを聞いて近くの席のメンバーが「それは一念三千(天台の仏教思想の根幹)の考え方ですね」と

話しました。私も「仏教には、道教の考え方が入っている」と感じ、「道教の教えは仏教を通じて日本人の考えの根底にもあります。中国をふるさとのように感じました」と彼女に伝えました。

阿倍仲麻呂や最澄など日本人留学生が命がけではるばる中国を訪れたのも、中国の学僧が辛苦の限りを尽くしてインドに旅したのも、学問、文化を必死に撰取し、血肉にし、後代に伝えようとしたためでしょう。玄奘が西域百十カ国を歴訪してまとめた「大唐西域記」にはシルクロードを通じた東西交流が鮮明に描かれています。

「江南の三大名楼」の一つで、眼下に広大な洞庭湖を見下ろし、北に長江を臨む雄大な景観で知られる湖南省岳陽市の岳陽楼に登り、また李白の詩「黃鶴楼にて孟浩然の広陵に之(ゆ)くを送る」にうたわれた同じく三大名楼の黃鶴楼(湖北省武漢市)に登って、一望千里の景色を見渡しました。すると、歴史の興亡変遷を経て、日本に素晴らしい文化・知識というプレゼントを伝えていただいた中国の偉人たちに感謝の思いが沸き上がってきました。

さて、観心の赤壁。孫権・劉備連合軍が、「諸葛孔明『奇門遁甲』の術で東南の大風を吹かせく三国志演義によるフィクション」、曹操軍を火攻めで攻撃。一気に撃破、燃え上がる炎で岸壁が真っ赤に染まり「赤壁」と名付けられたという「現場」で皆さんと記念撮影しました。テーマパークとして整備されていた現場は、当時の偉人たちの心情・情景を再現し、その思いを自身の心の中に深く取り込めることができる場となりました。



秦 爽

今回の旅で感想が多くありますが、経済の発展、国民生活の豊かさ、文化教養の向上が最も深い印象を残しました。

この馴染みのある土地に足を踏み入れるたびに、心は感動と温かさで満ち溢れます。日本に居住している私は、祖国の存在は常に帰属感を抱かせ、それは血に刻まれた深い感情だと思っています。故郷を離れた時は改革開放の初期でしたが、祖国が日々発展していく中で、海外の人々も徐々に胸を張って歩けるようになり、誇りを感じるようになってきました。そして今、実際に目にすることで、さらに心を震わせるものがあります。

飛行機が着陸するにつれ、私たちを迎えてくれるのは活気と情熱に満ちた人々の表情であり、目に映るのは、街並や建物、緑化、都市の様子といったあらゆる面で、現代化されつつも自然や人間性に寄り添った姿でした。地下鉄や高速道路、スマートシティの便利さは、祖国の発展の成果を、身をもって感じさせてくれます。

賑やかな観光地、禅の意を持つ淡雅な茶室、そして様々な都市の人々が楽しむリラックスした生活。こうした市井の生活のささいな変化の中にも、国民生活の質の向上と豊かさが反映されています。

高層ビルから整った街の通り、香火が盛んな寺院から千年の歴史の香りが漂う郊外の金木犀の山まで。竹製工芸の職人技から規模の大きい酒造工場まで。そして、かつて名高い武漢長江大橋から赤壁の古戦場、湖北武漢の黄鶴楼から湖南岳陽の岳陽楼まで。この旅は単に千里の大地を越えることだけでなく、時空を超えて古人と対話することでもあります。身近なあらゆる場所で、古朴さと活力が融合した新しい中国を感じることができました。

茶館の若い女子や、ハスの実を売る農家の女性、そしてタクシーの運転手など、こうした普通の人々との会話を通して、私は上昇志向にあふれた積極的な雰囲気を強く感じました。人々は自信に満ちており、古今東西について語り合い、未来への計画や生活の希望を語り、美しい生活への憧れや期待を示しています。これは物質的な豊かさ、社会の平和と安定、深い文化の底流、そして国の強さが人々に安心感と自信をもたらしているからこそです。この自信は、私たち海外の華僑にも誇りを感じさせます。

馴染みのある食事から伝統工芸の継承、親しみやすい方言から深い礼儀文化まで、これらすべてが家族の温かさを感じさせ、「帰郷」の気持ち、独特の文化的な根っこを感じさせてくれます。伝統と現代、包容と革新が交差し、私は中華文化の絶え間ない息吹の根源を深く感じ取ることができました。

ここで、私は自分の肩にある責任と使命を強く感じました。世界の平和にしても祖国の発展にしてもすべての人々が努力を必要としています。日本に居住している私は両国の末長く友好に微力ながら頑張っていきたいのです。祖国は常に華僑のしっかりとした後ろ盾であり、心の中で最も温かい懐かしさを抱かせる存在であり続けるでしょう。



余保 充徳(副団長)

10年ぶりに中国を訪問しました。久方ぶりの中国は変わらぬ活気に満ち、出会う方は皆、大きな心で歓迎をしてくれました。

移動2日、現地滞在4日の行程は駆け足でしたが、充実した実り多き時間を過ごす事が出来、感謝の気持ちで一杯です。

老子道徳経ゆかりの「長春観」「永興観」の訪問では、第五回日中友好コンサートにお越しいただいた、呉誠真副会長・葉信園道長と再会。報恩で支えられた施設で、お弟子さんたちが熱心に研鑽に励まれる姿に、中国の皆さんに根付く思想・哲学の深さを垣間見る思いでした。祖母と一緒に迎えてくれた8歳の少女とも出会い、孫ができたような思いになりました。

三国志の舞台となった、史跡や諸施設では悠久の歴史を感じることは元より、その場に佇むことで、なにかしら自身の時間軸が変わったようにも思います。赤壁の前に横たわる長江の流れを眺めていると、銅鑼の音や戦人の歓呼の声まで聞こえてくるようで、なんとも言えない没入感を体感しました。

昨年、大阪でお迎えした咸寧市の皆さまには、心を尽くした歓迎のご案内を頂き、感謝と感激の連続でした。一年ぶりの再会でしたが、旧知の友に会ったような思いがこみ上げ、心が一気に温かくなりました。出合いを重ねることの大切さを改めて認識したところです。

ご案内頂いた「竹子博覧館」「桂花博覧館」「黄鶴楼酒業」も素晴らしい施設で、歓迎の場も設けて頂き、忘れられない訪問となりました。

湖北科技学院では、観光では訪れることのない「図書館」併設の展示施設の見学も出来、何岳球先生とも新たな交流の一步を刻みました。来年の来日を心待ちにしています。準備段階からお世話になった熊領事にもこの場をかりて、御礼を申し上げたいと思います。

あっという間の訪中でしたが、忘れ得ぬ出会いと共に、心に幾つもの宝を積むことが出来ました。胡先生始め、ご尽力頂いた皆さまに感謝はつきません。そして皆さま無事故で、笑顔でお帰り頂け本当に良かったと思います。事業団として初めてのスタディツアーでしたが、今後も一層充実した交流訪問を重ねることが出来るよう、微力ながら精進して参りたいとお思います。有り難う御座いました。



赤壁ツアーに参加して 金馬 悦子

今回「胡先生と行く三国志・赤壁の旅」に参加することができて、本当にラッキーでした。以前より、三国志には興味があるものの長い小説や60巻もある横山光輝のコミックを読むためのまとまった時間がなかなか取れず、マンガ三国志IとIIで概要を知るに留まっていた。地域の活動で知り合った井上一先生が北千里の公民館で「三国志演義名場面」の定期講座を開講すると聞いて、気軽に参加できると思って申し込んだところ、他の受講者は三国志に造詣が深いのを知り、恥ずかしくなったのを覚えています。先生の講座は面白く、素人の私でもわかりやすく居眠りすることなく受講できて、その後の呑みコミュニケーションも楽しめました。三国志でのハイライトである赤壁には絶対行ってみたいと思っていたところ、赤壁へのツアーを計画しているという話を聞いたときは嬉しくて仕方なかったです。問題は日程調整でしたが、幸運にも参加できることになりました。

さて、ツアー初日。「もしかしたら赤壁へは行けないかもしれない。」という状況になった時、井上先生が事前に発信してくれた「赤壁ツアー日第4日」の中で、三国志の取材旅行での2大がっかりの1つが赤壁との記述があったのを思い出しました。岸壁に赤い字で赤壁と書かれているだけなら行けなくてもいいと思ってしまいましたが、団員の方々のご尽力によって訪問が可能になり、しかも咸寧市の方々に直接案内をさせていただけた赤壁古戦場。テーマパーク感はぬぐえませんが、一日中いたい気分でした。そして赤壁。長江にそびえる赤壁はがっかりさせることなく、対岸の曹操軍を睨みつける周瑜や劉備の居た歴史の舞台に自分もいることに感動しました。

私が初めて中国を訪れたのは約30年前で、初めての海外出張でした。北京から黄河沿いと三門峡周辺を転々としてのですが、当たり前とはいえ、当時とは大分変わっています。自転車から電気バイクになり、道路が整備され、信号を守っていました。私が中国を好きになったのは、食に対する執着とエネルギーギッシュなところ。朝から喧嘩口調で何をもめているのかと聞くと、昼食をどこで取るか？だったのです。それは今も変わらないと思います。また黄鶴楼で遊覧バスに乗る際、何さんと私が先頭にいたにも関わらず、他の観光客の団体が殺到し危うく乗り損うところでした。上海の地下鉄でひとつの空席に数人が殺到したのを思い出したのですが、これは以前の大阪でも電車に乗るのに並びませんでした。ただ困っている人を放っておけない人情味があるところ、これは中国も大阪も同じですね。

今回のツアーで一般の旅行では到底行くことができない稀有な体験をさせていただき感謝です。初めて道教というものに触れ、「少私寡欲」とは程遠い自分を認識し、今まで全く関心が無かった漢詩に興味を覚えました。また中国文化をもっと勉強しようと思っています。そして広い人脈をもつ胡金定先生のお人柄、団員のみなさまの温かい気配りで今回のツアーが忘れられないものになりました。本当にありがとうございました。心残りは竹のお茶が買えなかったことです。金木犀の香り漂う咸寧市でしたが、日本でも金木犀が咲き誇っています。しばらくの間は旅行が続いているような気分になれるでしょう。

村田 利治



井上団長の三国志演義名場面集の出版をラインで聞き、即刻Amazonで購入したのが、購入記録を見ると5月15日でありました。

そこから5ヶ月の間に三国志演義を通じてたくさんの学びと気づき、そして今回の生涯忘れ難き素晴らしい大感動の旅行を経験させていただきました。

今回の旅行に参加させてもらったことは、間違いなく井上団長の名場面集の、読む人の興味を沸き立たせる楽しい文章と、余談を交えた内容の文章の面白い講義の運び方こそが、キッカケであり、大きなご縁の起点原点であります。

そして三国志演義のなかでの唯一といっても過言ではない、なるべく戦闘を避けようとする『ネゴシエーター』、『平和主義者』の『魯粛』を一番に賛辞される、その井上団長の想いもそのお人柄をよく映しておられ、人間味溢れいつも笑顔の団長のお人柄こそが、今回の旅行へ参加するかどうか迷っていた私の背中を大きく前へ一歩押しだした要因のひとつでありました。

井上団長へ、ここに心より感謝の意を表させていただきます。

また不思議な縁のもつれとして、『道教』とも出会うことができました。我が師と仰ぐ人物の『仏法は道理なり』との言葉にある『道理』についても老子思想の『道』であり、翻訳をした鳩摩羅什の翻訳の語源にも『道』の思想が含まれていることに、とても深い気づきと意義を感じました。

また長春観の呉誠真先生の著書で、胡金定先生の日本語翻訳された『道德経闡微』も完読させていただきましたが、『道』が宇宙の『法則』、『方程式』、『プログラム』を表していると言うことが大変良くわかり、量子力学と言う科学的根拠と比較しても明らかな素晴らしい教えであることが理解できました。

今回の旅では、中国三大奇書の1つ『三国志演義』と中国三大宗教の1つ道教の『道德経』を学び、中華文化をさらに深めて知ることが出来、そして日本文化の源流を知り得たと思います。

そして何より「文化交流」を深めていくことが2国間の平和を築いていくためにどれほど重要なことか、身をもって経験させてもらいました。

「偏見」と「差別」が実体験によるふれあいにより「認知」と「区別」に変わる…と言うことを経験させてもらいました。

今後さらに中華文化を学び、そして交流のためにどんどんと中国へ訪問し、そして周囲の人々への文化の伝達役としての使命を果たしていけるよう、努力して参りたいと思います。

最後に今回の旅の最大の功労者であられます胡金定先生の日中友好へのご尽力に対する敬意、そして心より最大の感謝にて締めくくらせていただきます。

胡先生、本当にありがとうございました。